

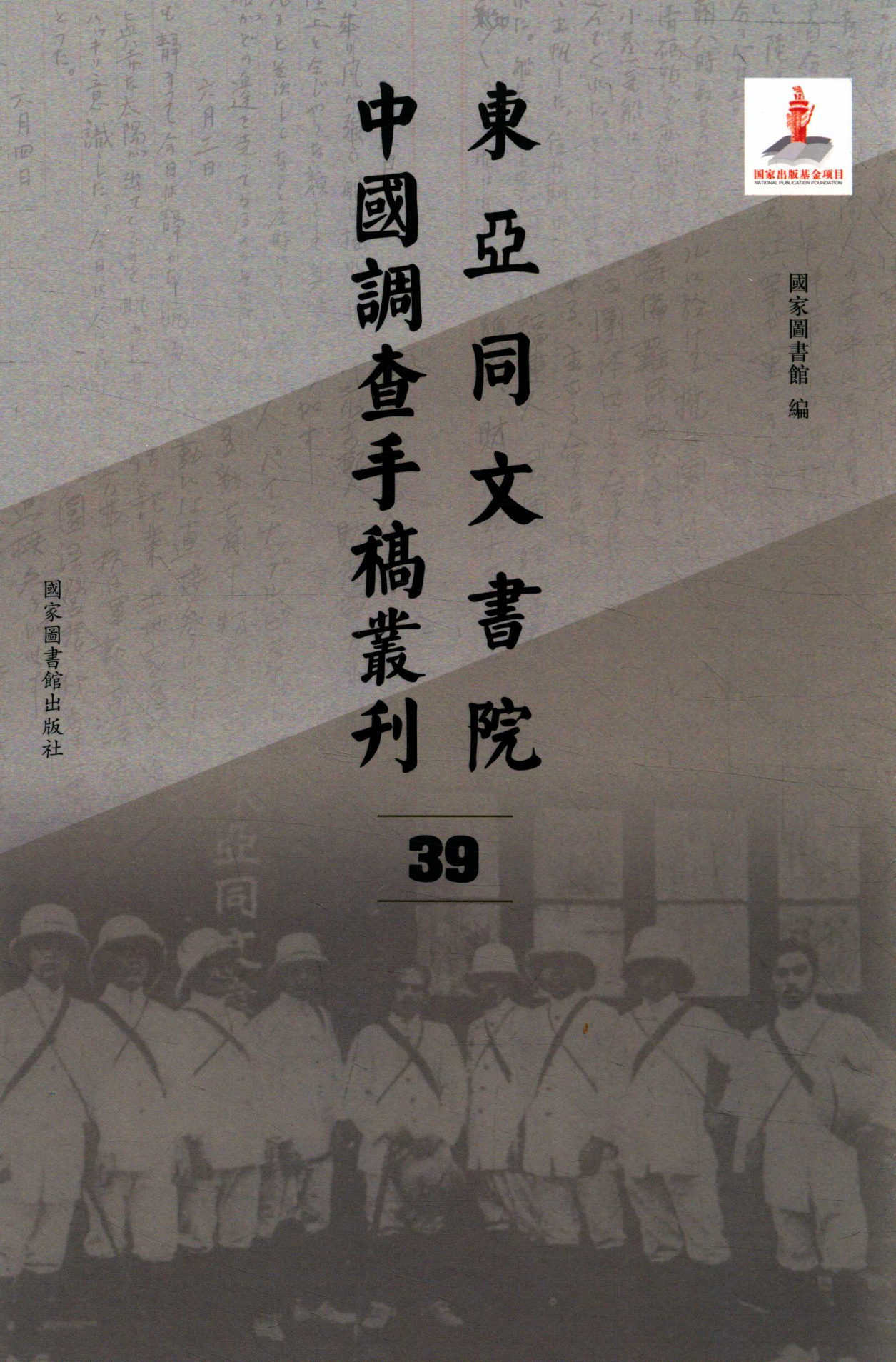


國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

39

國家圖書館出版社





國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

39

國家圖書館出版社

第三九冊目録

昭和七年（一九三二）旅行日誌（第二十九期生）

國澤徳滿※

山崎正夫

古野融※

乾次郎※

長谷川光雄

第五卷

.....一

第六卷

.....一四三

第七卷

.....二八七

第八卷

.....三七一

第九卷

.....五一九

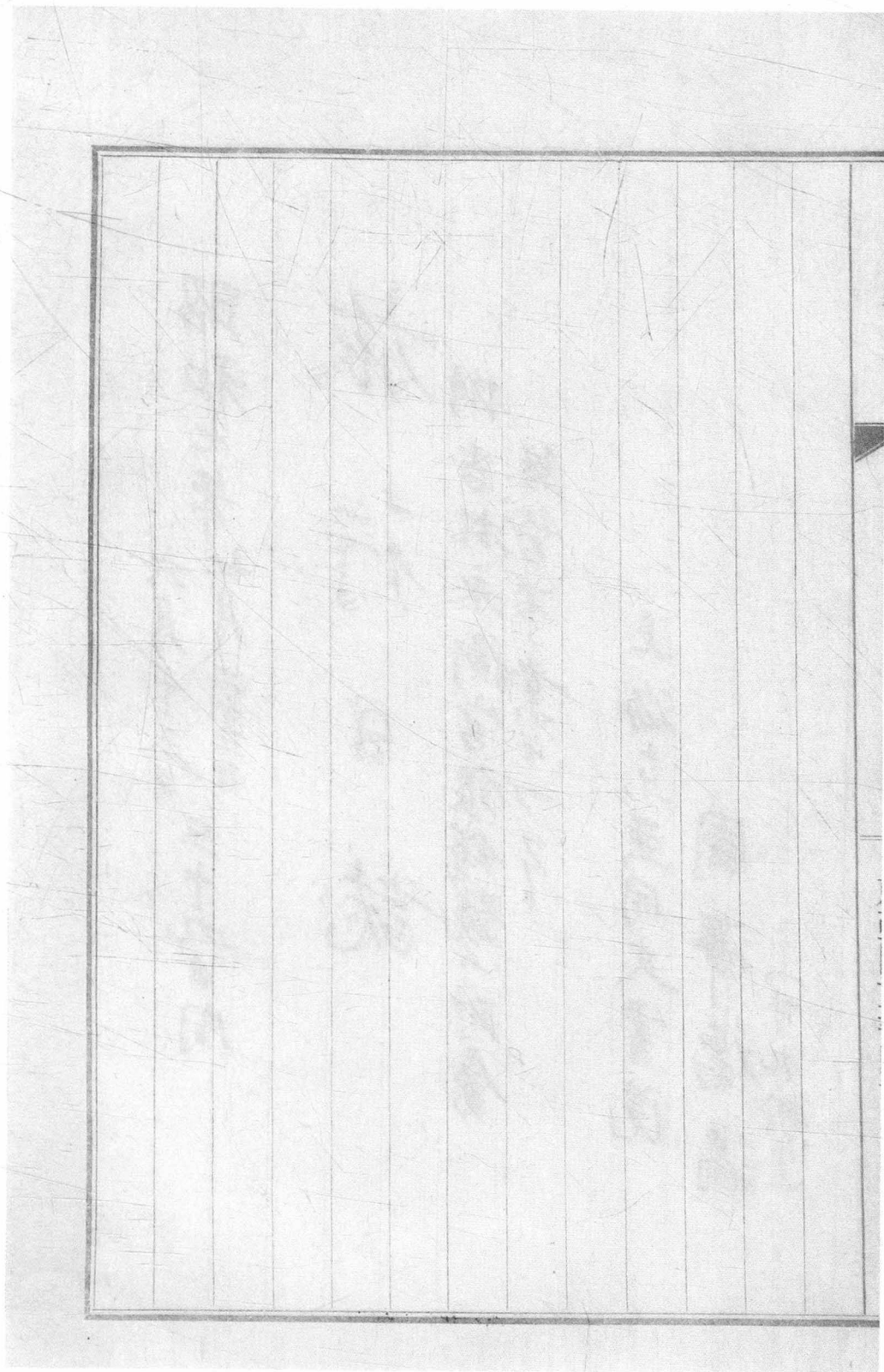
昭和七年 六月十五日
七月二十三日 三十九日間

旅行日記

附吉林永衡官銀錢號の附屬
經營事業について

上海东亚同文書院

國澤德滿
(廿九期生)



第五卷

旅行日記

一九三三年

六月十五日 昨夜来親切に私の為りて下さる方達の送別会
で次第が別々嫌ひな酒を一寸飲みすぎたが未だ醒
めまじく空気が早く起すといふと屋小まよと親切に起す日
替へるが眼蓋が重く仲間の開かぬ。早急の準備が出来ぬもの
待ちに待つてゐるその機会が今やういふ事だ。六時半元氣
を出して飛び起さる。昨日色々忙しうな事な荷物何れも
出まうゐる。さあ早く整理を。特に行く荷物トランクの立
中に水を入り水がふえず。九時日も留守にする。おのち中へ喰は
れ水は様々。又乱雑そのまゝ。飛び出すのも気がふける。さあ水の
方も入り水がふえず短時間忙しうな事やり切れる。特
て行く荷物も水も要さぬ。ううと考へ水も考へ
る程。ふたつ許りあるが殆んど大部分を割愛して僅に身の廻

リのみと持ち行く事にする。朝飯は書院唯一、強壯清鷄蛋
 の焼一烤で最後の精力をつぎ出す。私の大旅行は私
 んとては少し早大旅行と云うるが暑気がひけるものを
 いや私も知りぬく大部分の人がそうである。私も自身
 が満洲出身であり、本々の旅行で旅する所の強人との所を初
 の中学時代旅行と云うであらう。例年の節分浴雨朝に付
 木樹の蔭を登り夕暮御堂を寝るといふ今迄私達の如く
 ある旅行とは全く趣を異にしてゐるところがあると云ふ気分があ
 る。又今迄私達が三度の旅行隊を送る旅行姿と云う日昔の
 色の便服（ヘルメット）それが私等の情けなくお服装だ。又旅行の
 と云うはそのものと思つてゐるものが本々の旅行隊の全部
 が制服制帽と云ふ姿。それなりや旅行と云ふ気分を殺す事甚
 し。送る人の気分も夏休を終了する生を見送ると云ふ間もなく

する氣持に違ふ。それをも旅行隊全部に平教人といふ大勢の
 出發にから流石の境も人一杯に見送る人見送る人並べに
 自動車の数もおどろく。例年の如く嵐吹りくの歌も死んで
 去る僅に敬愛の花火が打ち揚がりその氣分をそそぐ
 了位のもだ。自動車の前で記念撮影をとり。さよなら元
 氣よくと皆がはけり。學小、大谷先生、三国さん、大谷小隊長
 と御別小、挨拶、部長も御挨拶しようと思つてゐる。次女が
 見るとあんなに御挨拶も出来ず、出發する事とす
 うとあふさぎ、拍手を送る。次女もくくと自動車をあて行く
 我々も殿に近く、校門を出發。ふと夕方懐しの會合も御別
 小、虹橋駅、並本もあやう、それだけわりの新線、越え私
 等の壯途を見送りく、水やむ、自動車を、アカシヤの線の中
 車を眼を、フランスタウンを過る一畝、黄浦鳴頭、朝も

やつ、まゐる街も、天気も、鳴頭らうと垣角、太陽が雲つゝあう
 か人めん照りつゝ、船の見送りも例年と比して何と静かな事
 だらう。眼見送る人も僅に矢を数人と同級生か旧主名位、例年
 あれば北駅の別小浦東の別小、船を流すに涙を流さうと割
 離れ、併しお年はそれもない、上海特有の子供の曲藝師が曲
 藝を足で銅幣とわらうのを、年寄りの最後の銅羅
 汽笛に船は岸壁と離れ、我々の長き月陰を、黄浦江
 の濁流を下り初め、舟を揺り、上海事を引き揚げた
 時もこの船のつゝ、帰るを待つがそれ、例年と比して目に
 やほり目、この船が上海に帰る事、又この船で満洲の旅を
 つて行く、上海の港よ去る、又九月は入る、會はう。
 戦後の吳淞の街、復興のこの音、鍛冶屋の鋸の音、今もな
 帰る事、時は如何なる変化か、おま、知ら、早く復興して又

三等艀室は致く和国文書院の旅行途中の時代の修養所
思ふが如く、未だ明治の朝を居るやあるか。昨日の睡眠不足と
より返すこととす。毎日の事さうな悔は既にこれ指定地さう
青島大陸するやどうも松便さうさうなぬと云ふ。然し
既に朝さうさう便さうさうさうさうさうさうさうさうさう
浚腸さうさう無理に出さう。婦人さうさう同行Nに代りやう
曾さうさう免さうさう角さうさう義務さうさうぬさうさう事さうさう。

六月十二日 早朝より濃霧降。暑き於て、當地の濃霧
の深き事有名なりと云ふ。一町先に入らば、わが舟船
は難航なりと妙く逢ふ。五分毎に、船

静かである海上に、このやうな響き、断末魔の悲鳴の如く
 青島着午前十一時の豫定である港外五六哩の地奥に
 濃霧の如く立往生となりその場所六時台程停船午後
 六時頃、検査ありて本日午後遂に入港不可能。青島の街と
 直近を見よう、如何にする能はず遂に船中より一泊。

六月十七日、午前九時昨日までの濃霧も漸く晴し入港
 に決定。その日も船中更に用心の陰より追玉。船中
 再なる糞便検査あり。青島は北支に於ける唯一の海港
 たる故に停泊せる軍艦船も多く亞米利加の駆逐艦
 が数隻海を江戸と取りつゝある。青島の街は海から見
 ると、街の緑の森と赤い屋根が調和良く静かな海面に
 その姿を映りつゝある。日本の景色とも亦一変する。

系と如何に現金で持ち行くに其分する所をどうも現金の
 三百萬程、幸ひそれのついで相違ふ所と云う。貿易用として
 現金は百五十萬の鈔票と発行する故、系をもつてあつた
 容易さといふ事を聞かなくては必要あるが、現銀は實に後日鈔
 票を受け取る系より附近にある玉澤親光局に行き、明日の
 旅行清南行のダイヤグラムを受け取り、商量の結果清南經由天
 津までの切符を買ふ事だ、其處に勤めたりする日本人の従業員、
 の漂着する北京官誌は完全な感心させ、青島にけ
 てもおもしろい、北京語が完全な通用する、おもしろい、得意
 思ふ、起るすまゝである、午後三時半公共汽車で滄口行を決
 行する、青島の街は丘陵の中に建て、小な街である、自然交通機
 関は自動車と黄包車に限る、黄包車は丘を滑り下る
 リ、その乗り場も人情心が湧きあふ、このたゞの街の電氣

のふいと云ふ事は何とも淋しさを感ずるところ。

倉口は青島市の郊外強くと御達まであるが青島市の工場の大
部はここに集まりあり工業の区域であるところである。

途中を湯渾浦公司と見受るゝところを始てるこの辺りも工場
区域で燐寸工場あり製材工場あり窯業会社あり。その作業
の多くは燐寸の現在ところへなげゝあるが知るゝか歩くと見ると
日々の投資額が少くとも会社の林をなしてゐる。行く事数町
より鬱蒼と茂る並木の下に支那海軍陸戦隊あり
潇洒なる海で歩くとゐる。水も清く、この辺りは静かである
既に鳴く蟲の音もやわやわと程々ある。大湯渾浦公司
より工場見学し、あると道下ると心良く歩くと下りまう
技師の方から専門的である言語を丁寧に説明をして下り
る。水と地、いゝのふり理屈がある。その地を歩くと積み事や

あるじんの空瓶に隠れする位のもある。さう工場内を見廻す水
 が今日日土曜日より今日の作業あり眠れ終り掃除してゐると申す
 て慥慥ふかうき隆々見する事け出あるをき作業系不曉け
 知る事が出来貯蔵庫に於て「ビール」の香は温飲を起すに充分な
 あうその空を穿つても未だ身傍の何處もその香が残るゝゝる様
 で一杯のまうく水ふかふと思ふが請求する事もあらず瓶結の
 作業も是よりしてゐるその速運さにおおきく謝し「暇をとり
 る」流後河南路に於て「休」る同志会支部の歓迎會に
 出席主賓方々お人先ず甘人かうの大宴會であつた十時
 過散會し青島の夜の街を散策す。

七月十八日 朝六時半起床昨夜のメートルの寸揚りあふ
 るのか頭の重く何とも頭がのすゝむ様を朝の街を散歩